
られる。と彼は口だけで笑いながら言っていたがそんなのは嘘だろうと私は長い前髪で笑わない

こをり

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君にあげられる愛は小指の先、いや蟻の頭くらいならわけられる。と彼は口だけで笑いながら言っていたがそんなのは嘘だろうと私は長い前髪で笑わない目を隠した。きっと、いや、絶対気づいているだろうけど

【Nコード】

N65290

【作者名】

こをり

【あらすじ】

過去に未練タラタラの女の子とその女の子を憎んでいるがほんのちよつとだけ愛してしまっている男の子の話。お互い選択肢を見誤った苛立ちをぶつけている。（まるで子供のケンカのように）

コンコン

ノックの音がやけに大きく聞える

入ってきたのは好奇心で殺されるような男

「こんなところに来る物好きがまだいたなんて」

「いちや悪い？」

「おや、皮肉だったかな？」

「君が皮肉を言わない日なんて無いだろ」

「相変わらずだね」

「君もね」

こういうところを私は気にしている

他の奴等なら気分を害してさっさと帰ってしまうからだ

なぜだかはもちろん分かってる。が、直さない（直そうとも思わない）

「君は暇なのかい？」

「見て分からない？」

「おや？言うようになったね」

「おかげさまで」

「そう拗ねるな。この私の宝物の飴玉でもやろうか？」

「ご遠慮させていただきます」

「冷たいねえ」

「君の口からそんな言葉が出るなんて」

「どう言う意味だい？」

「そーゆー意味です」

淡々として脈絡の無い話題
いつもの事

「友達は出来たのかな？」

「うん。相変わらずだよ」

「相変わらずか」

「分かってる？」

「分かってる」

「君のせいで友達が出来ないって事」

「責任展開はやめたまえ」

「今さっき分かってるって言ったじゃないか」

「ん？そうだったかな？」

「うん。そうだった」

「細かいね」

「君に言われちゃおしまいだ」

「そんなことは無いもつと胸を張りたまえ」

「よしなよ。まな板だって事がばれる」

「お心使いありがとう。しね」

「レディーがそんなこと言っちゃ駄目だよ」

「それはそれは失礼しました。以後気をつけますので」

「君は役者になれないね」

「残念だ」

「残念なの？」

「もちろん。1つの将来へと伸びる道が閉ざされたのだからね」

「君の将来は決まってるだろ」

「そうだったかな？」

「とぼける事だけはハリウッドスター級だね」

「お褒めに預かり光栄ですわ」

「へたくそ」

「知ってる」

お互い目は見ない
彼の目は真直ぐで純粹で綺麗で好奇心旺盛で大きくて、嘘を赦さないような目だった

気づいたかな？そう、過去形なんだよ

私と出会ってしまったせいで歪んで掠れて嘘や侮辱を気にしない目になった

好奇心旺盛なのはかわらないけど

「何を考えてるのか知らないけど、そんな顔もできるんだ」

「百面相なら得意だよ」

「嘘だ」

うん、嘘だよ

でもその言葉は心で呟いた

前の君ならそのまま鵜呑みにして後から嘔吐き、と笑いながら指摘しただろうに

今では私の目を射抜くように見て断言するようになったのだね

こんなふうにした張本人なのにな

「君は変わったね」

「……ふざけてるの？」

頼むからその目を伏せてくれ

瞼と言う薄い壁で私を視界から消してくれ

罪悪感、後悔、懺悔、どれだけ許しを請うても今の君では無意味で嘘になるのだろう

謝る気など不毛もないけど

「こんな俺は嫌い？」

「好きだよ」

「君は本当に大根役者だ」

「それで結構、君も演じてみればいい。難しさが分かるよ」

「まさか俺はスカウトが来るくらい上手に演技きつてやるさ」

「その自信はどこから？」

「君から」

聞くんじゃなかった

小さく舌打ちをしてから笑ってやったら興味が失せたかのように目を伏せた

君とであって1年。180 変わった君。10 だけ甘くなった私。

「君にスカウトがくるなら私には宝塚からかな？」

「今日は4月1日じゃないよね？」

「馬鹿にしないでもらいたいね」

「そんなつもりじゃないよ、ただの確認」

「それはよかった、安心したよ」

馬鹿みたいなやり取り

私はこの時間を苦痛と思うのにこの時間が無くなればきつと、

「そろそろ帰ろうかな？」

「おや？今日はずいぶんと早いね」

「うん、君が早く帰って欲しそうな顔をしていたから」

「・・・そうかい？」

「間があつた」

「呼吸をしていたんだ、そんな些細な時間すら与えてくれないのかい？」

「もう一度言うけど、今日の君はふざけてるの？」
「まさか」

「『君は変わったね？』変えたのはどこのどいつだ」
「変わる選択肢はやった、選んだのは君だ」
「初めから1つしかなかったのに？」
「0もあつただろうに」

口を紡いだ君は私を軽蔑したかのような目で睨みつけた
前なら困つたように笑つて答えを曖昧にしたのにな
口を薄き開き言葉を発する前に

「私は前の君も好きだつたよ」
「僕は今でも君が嫌いだよ」

「・・・笑つて言う事じゃないだろ」
「間があつた」

「瞬きをしていたんだ、そんな些細な時間すら与えてくれないのか
い？」

「今日の君もむかつく」
「いつもの事だろう？それともこの1年でようやく気づけたのかな
？」

「きつと出会つた瞬間僕は無意識に気がついていたよ」
「ならその時が引き際だつたんだ」
「そつ、だつたのかな？」
「そろそろ帰るんだろう？送つていつて欲しいのかい？」
「君に無駄な労働をさせられない」
「優しさだけは昔から変わらないな」
「君がそつなつたからだろ」

吐き捨てるかのように早口で言つてから力を込めてドアを閉めてい
つた

昔と違う。昔は、昔

「私は君に恋をしていたんだよ、知っていたかい？」

縛り付けたくて、離れて行って欲しくなくて

ああ、こんな事するべきじゃなかった。こんな結果になると分かっていたら過去の私をぶん殴りたい

そっと、彼が出て行ったドアを見る

きつと2、3日したら嫌々顔を出すのдар。

「ごめんなさい」

それは誰に対しての謝罪か。

私は無意識のうちに腹を撫でた

優しくかった君に、逢いたい（私が言える立場じゃないのにね）
とくん、中で動いた気がした

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6529o/>

君にあげられる愛は小指の先、いや蟻の頭くらいならわけられる。と彼は口た

2010年11月2日01時49分発行